

## 洋14-38 (ショートコメント)

### 「グロリアの青春」 ★★★

2014 (平成26) 年3月12日鑑

賞<シネリーブル梅田>

監督/セバスティアン・レリオ

脚本/セバスティアン・レリオ、ゴンサロ・マサ

グロリア (13年前に離婚した58歳の女) /パウリーナ・ガルシア

ロドルフォ (妻と離婚した男・グロリアの恋人) /セルヒオ・エルナンデス

ペドロ (グロリアの息子) /ディエゴ・フォンテシージャ

マーシャル/マルシアル・タグレ

アナ (グロリアの娘) /ファビオラ・サモラ

ガブリエル (グロリアの元夫) /アルファンドラ・ゴエイク

マリア/アントニア・サンタ・マリア

2013年・スペイン、チリ合作映画・109分

配給/トランスフォーマー

◆昔から「老いるの恋」という言葉があるが、近時の渡辺淳一の小説『あじさい日記』や岸恵子の小説『わりなき恋』を読めば、男女とも「老いるの恋」を求めていることがよくわかる。しかし、若い恋人同士なら2人きりの恋を何の制約なく楽しむことができても、58歳のグロリア (パウリーナ・ガルシア) やその恋人になる (多分70歳を超えた?) ロドルフォ (セルヒオ・エルナンデス) の場合は、それぞれ離婚した夫や妻の問題や子供たちの問題があるから、自由にそれを楽しむのは難しいはずだ。現に、本作にみるロドルフォは経済面でも教養面でも性的能力においてもグロリアにとって理想的な男性だったが、離婚した妻はともかく子供たちへの責任感が強いため、今なおあれこれと面倒を見ていたから、その点はグロリアにとってマイナス。

他方、13年前に離婚し、キャリアウーマンとして働いているグロリアは、息子のペドロ (ディエゴ・フォンテシージャ) や娘のアナ (ファビオラ・サモラ) がそれぞれ自立してるから、全くのフリー。したがって、仕事が終わるとヨガ教室に通い、気が向いたら馴染みのダンスホールへ行って踊り、飲みかつボーイハント (?) を楽しむことができるらしい。なるほど、なるほど……。

◆本作でグロリアを演じた当時53歳のパウリーナ・ガルシアは、第63回ベルリン国際映画祭で銀熊賞・主演女優賞を受賞したが、それは文字どおりヌードも辞さない体当たりの熱演が評価されたためだ。車を運転しながら音楽を楽しむグロリア、ヨガで若い人たちに負けずに汗を流し笑い転げるグロリア、仕事上でバリバリと指示を出すグロリア。その姿を見るとたしかに58歳のオバさんにしては輝いている。しかし日本では、こんなオバさんが一人でダンスホールにやってきて踊っていれば、ヘンな目で見られるはずだ。

ところが、本作では互いに視線を交わしたロドルフォとの間で話が盛り上がり、ダンスを楽しんだ挙げ句、そのままベッドインのお楽しみになるから、さすがラテン系のチリという国 (?) はすごい。このスピード感 (?) には、男はいつでも女性との恋が不可欠だと訴える渡辺淳一氏も真っ青だろう。もっとも、わざわざ映画館に来ているのだから、そこで観るベッドシーンは、かつての日活ロマンポルノばりの美しさとまではいかなくても、それなりのものでなくちゃ……。そんなキレイ好きの私 (?) は、本作冒頭にみる初老の男と58歳のオバさんとのベッドシーンに、まずゲンナリ。

◆2人とも離婚を経験し、それぞれ経済的に自立しているのだから、「世間体」さえ気にしなければ、自由に付き合えるはず。58歳にして「青春」を謳歌しているグロリアはそう考えていたが、どうもロドルフォの方はそうでもないらしい。その点の食い違いが顕著だから、当初は理想のカップルのように見えた2人の間にはその後、大きなほころびが……。

その一度目は、息子ペドロの誕生日パーティーに、グロリアがロドルフォを招いた時。そこには近々スウェーデンの恋人のところに飛んでいく娘アナやグロリアの元夫のガブリエル (アルファンドラ・ゴエイク) からも参加していたから、13年ぶりの話題が家族のことになるのはやむをえない。そのため、当初はそんなプライベートなパーティーに自分を招いてくれたことを感謝していたロドルフォがすねてしまい、勝手に家を出て行ってしまったから、アレレ……。

二度目は、再度のロドルフォからのアタックにグロリアが折れ、豪華なリゾートホテルで2人だけの休暇を過ごそうとした時。そこでも、日本では考えられないような老人たち (?) のベッドインの儀式 (?) が行われたが、そこでロドルフォのケータイが鳴ると、たちまち興奮げに……。ロドルフォは元海軍将校で大人向けの遊園地を経営している男だから、もう少し大人で遊び慣れているのかと思ったが、これでは「老いるの恋」を楽しむ資格や能力に欠けているのでは……。グロリアがあまりキレイでもない身体を堂々と曝してロドルフォに迫るシーンにはビックリさせられたが、これで主演女優賞を受賞できたとしたら、ちょっと……。

◆グロリアは、せっかく私という立派な恋人がいながら、ケータイが鳴ると何かと元妻や娘たちの世話を焼くことにあくせくしているロドルフォの対応が我慢ならなかったらしい。その結果、いったんはロドルフォの遊園地で遊んだペイント銃をゴミ箱に捨ててしまうことで満足していたが、今度はそれを持ってロドルフォの自宅へ行き、ロドルフォを「襲撃」すべく待機することに。そして、帰宅してきたロドルフォに向けてペイント銃を数発発射。グロリアはこれによって気分がサッパリしたようだが、これを発見したロドルフォの娘からは「このクソ女が！」との罵声が飛んできたのは当然だ。男の私としては、こんなシーンを観ると、女と付き合い始めるのは簡単だが、別れるのは難しいことを痛感！

本作のチラシには「すべてをさらけ出した主演女優の体当たり演技に、全世界が拍手喝采！」「今を生きる全ての女性に捧げる、とびきりの物語！」とグロリアの生き方を絶賛しているが、そうなるためには、ロドルフォのような男ではなく、もっと理想的な男を見つけなければダメなのでは……。そう思っていると、グロリアは再びダンスホールに顔を出し始めたから、再度ここでボーイハントを……。ひょっとして、65歳の私がここでグロリアと出会えば、ロドルフォのように視線で合図を送り一緒にダンスを……。いやいや、それは私の方から願い下げだ。

201

4 (平成26) 年3月13日記